



最終日に快癒したペンギンを野生に帰した



南アフリカで見つけた将来の方向性 重油被害を受けたペンギン治療し学ぶ

法学部国際企業関係法学科3年 ^{いししい} ^{たかゆき} 石井 孝佑
私立栄東高校

はじめに

2015年の夏、私は8月12日から9月20日までの約6週間、「やる気応援奨学金」をいただき、南アフリカ共和国・ケープタウンで生態保全のボランティア活動に従事した。この短期留学という経験は、私を2016年の秋から始まる長期留学へと後押しをしてくれた。日本での学生生活が残り数カ月となる今、本奨学金で得ることが出来た経験をご報告したい。

テーマ設定と背景

本奨学金での活動には、学生がそれぞれのテーマを各自で設定する必要がある。私のテーマは一言で言えば、「エネルギー問題と環境保護」である。しかし、最も関心があったテーマは環境問題のようなグローバル 이슈ではなく、国内における安定したエネルギー資源の供給という極めてドメスティックなものであった。この背景には、震災直後の計画停電とガソリン不足によって、当時体調不良で手術を予定していた私の治療が難航したことがある。日本が天然資源に乏しいことは、知っていたが、この一件で、私はその事実を現実の中で体験することが出来た。この経験を生かそうと、大学入学ま

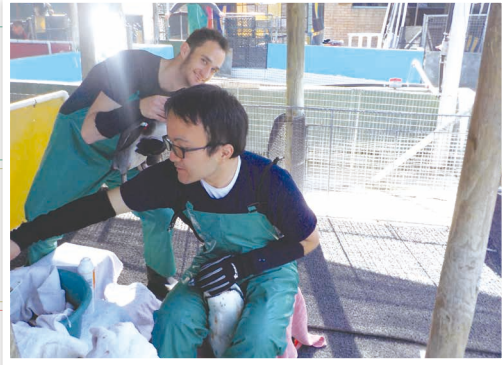
でに自分なりに勉強を進め、将来は日本のエネルギー安全保障にかかわる仕事がしたいという漠然とした目標を立てた。その中でも、資源が乏しい日本のために、ありとあらゆる手を使って必要な資源を調達する商社マンを私は純粹にかっこいいと思っていた。そのため、本奨学金制度を友人から紹介された時、私は「エネルギー資源がどこから来るのか」を知るために、オーストラリアや中東の資源採掘会社などのインターンを検討していた。そして、総合商社や資源採掘会社がどのような仕事をしているかを本格的に勉強しようと思ひ、インターネットと図書館を利用してさまざまな記事を読んでいたところ、偶然とある記事を読んだ。

重油が絶滅危惧種を作り出している

私を読んだ記事は、1994年に南アフリカで起こった重油流出事故についての回顧記事であった。その中で、記者は当時現場で事故の対処に当たった国際機関の担当者の話を引用し、重油が多くの海鳥の命を脅かしている事実を、写真付きで紹介していた。これまでエネルギーがもたらす良い側面ばかりを見ていた私は、この記事を読むことで、初めてエネルギーがもたらす負の側面に気付かされた。この記事を



6週間を過ごしたホテル「Element」



最も大変な1日3回の薬餌の時間

きっかけに、私は計画のテーマを「エネルギー資源がもたらす負の影響を自分の目で確かめること」に変更した。

実際の活動

テーマを決めた後、すぐにボランティアやインターンを募集している団体を探した。エネルギー資源の開発が環境や野生動物に負の影響を与えている例は、世界中に幾つもあった。中でも私は日本が一番輸入に依存している石油に焦点を当てたかったので、活動地域は、重油流出事故が最も頻発している南アフリカ・ケープタウンにした。当初は治安などの理由から、両親や周りの教授に反対されたが、外務省や現地の不動産業者に治安を確認することで、何とか了承してもらうことが出来た。この時培った根性や情報収集力が今の自分の一番の支えになっている。

いざ、南アフリカへ

現地の活動内容としては、1994年の事故の対処に当たったNPOでボランティアとして働くことに決めた。多くの同期が語学学校で英語を学ぶ中、私は少しでも現場を知りたかったので、ボランティア活動以外の語学研修は設定しなかった。この1日に8時間を週に5日働いた経験は、英語力の向上は

もちろん、国際的な集団での働き方を私に教えてくれた。約16カ国から集まった国際ボランティアと共に働いたこの経験が、最も価値があった。

仕事内容は、環境保護の中でも「生態保全」という活動に含まれる。この聞き慣れない言葉は、誤解を恐れずに言えば、「環境問題によって影響を受ける可能性がある動植物の生態系を、その問題の影響が及ぶ前に保護する」とことを指す。しかし、環境問題の影響を受ける生態系の数はあまりにも多いため、この分野の専門家というものはほぼ存在せず、実際には各生態系の専門家たちが結束することで、この学術分野は成り立っている。

私の所属したNPOが担当していた生態系は海鳥で、とりわけペンギンを私は任された。そのため、現地での活動は、重油による健康被害を受けたペンギンの治療が中心であった。このNPOの技術は世界で最も優れているとも言われており、1994年の事故当時の海鳥の死亡率が50%を超えていたのに対し、2000年に起きた同様の事故では死亡率を10%未満に抑えることが出来た。私はこの技術を学びながら、同時に現地のNPOが抱える経済的・法律的な問題についてスタッフにインタビューを進めた。

帰国後は、南アフリカでの活動を通して得た知識と経験を、少しでも多くの人に知ってもらうための努力をしている。日本における活動は、「日本ペンギン会議」というNPOの力をお借りしており、現在は、講演会へ参加することや年報などの記事を執筆することで、南アフリカでの経験を国内の専門家を中心に伝えている。

これから

これまでの取り組みは、環境問題への事後対応が主な活動内容であった。しかし、実際に南アフリカで活動を行ったことで、この活動だけでは根本的な解決にならないことを身に染みて感じた。その経験を生かすべく、これからの私の活動は保全活動を必要としな社会的な構造を作り出すことに焦点を当てたいと考えている。そのために、今年の秋からスウェーデンで開発学を学び、将来的に環境への負荷が少ない都市開発を実現することが私の今の夢だ。最初の商社マンという夢からはだいぶ離れてはいるが、日本のエネルギー安全保障に貢献したいという思いは今も変わっていない。今後は、この活動で得た「主体性」も大切にすることで、これまで以上に世の中に貢献出来る人間になりたいと考えている。